Vol. 03

農業は最高の自己表現

萩原（はぎわら） 健司（けんじ）

（28歳）

－奈良市山町－

思いを形に…農業への挑戦が始まる！

「大学生で就職活動を始めるとき、親には『家業は継がない』宣言をしたんです」。

耳にはピアス、足元はクロックス、おしゃれな作業着姿と、一見農業に従事するようには見えない風貌で当時を思い返す萩原さん。就農前は、『休みがない・汚い・しんどい・儲からない…』と、農業に対するイメージはネガティブなものばかりだったという。

就職活動を始めてすぐ、企業訪問をしたり、社会人の先輩、友人の話を聞いたりした。そんな中、ふと疑問がわく。会社に属するというのはそんなに大事なことなのか？ 自分で考えて、何かするほうがおもしろいし、やりがいがあるのでは？

普通に就職しても将来の保障はない時代。仕事に対する不満もたくさん聞いた。それなら自分で何かを始めようかとも考えた。

そんなとき、祖父と父の姿が脳裏に浮かんだ。彼らは自分たちで考え行動し、それを形にしているのではないか？ 農業は自分の思いを形にできるのでは？ いつしか、農業に対して少しポジティブに考えるようになっていた。

そして、農業を継がない宣言から7年ほど経った今、萩原さんはいちご農家の三代目として立派に家業を支えている。

「僕がいちご農家を継ぐと言っても、親は最初全然信じてなかったですよ。それまでいちごに見向きもせず、遊んでばっかりだった息子が、厳しい農業の仕事に耐えられると思ってなかったんでしょう」と話す萩原さんのそばで、今も毎日共に作業をする父、母、祖父が目をほそめる。

仕事を始めた当初、何から何まで父や祖父のすることを見て学んだ。想像していたよりもきつい作業が山ほどあったが、思いを実現できるようになる期待感が強く、心が折れることはなかったという。

ワガママな作物だからこそ感じるやりがい

品種によっていちごの味や食感が違うのは当然のことだが、実際にその味がどう決まるかは、作り手次第なのだと萩原さんは言う。同じ品種でも、土耕や高設などの栽培方法によって味は大きく変わる。さらに言えば、光の当たる時間や角度が変わるため、ビニールハウスの位置によっても味にかなり差が出るというのだ。ここに、萩原さん自身が考え、行動し、思いを形にしていく醍醐味がある。

「いちごほどワガママな農作物はないでしょうね」と萩原さん。

手間と気持ちを詰め込んだいちごだからこそ、そのワガママぶりが余計にかわいい！と言わんばかりの笑顔で語る。

奈良の「農」をもっとPRしたい

実際に農業を仕事にしてみて、それまでの農業に対するイメージがいかに間違っていたかが分かった。

「農業なんかを本業にしたら、顔を合わせる相手は家族やごく限られた人たちだけになって、自分の世界がすごく狭くなってしまうんじゃないか、つまらなくなってしまうんじゃないかと思っていました。でも、実際には組織があったり、同志と思えるような仲間と知り合えたり、やればやるほどつながりが広がって、面白くなっていったんです」

今では、農業を盛り上げていくため、若い研修生を受け入れたり、奈良県や近隣府県の農業従事者との交流を増やしたりするなど、積極的にさまざまな活動に取り組む。若い世代の農業者が連携し、意見やアイデアを出し合って、おもしろいこと、チャレンジできる新しいことを日々どんどん模索している。

「どうせやるならとことんやりたい。いちごのおいしさを伝えること、そして奈良の農業のPRにも取り組んでいきたいですね」。

意気込む萩原さんの目には、いちごにかける思いと、農業という生業への誇りが輝いている。

県をあげて品種改良される奈良のいちご

奈良県では長きに渡り、県をあげていちごの品種改良が行われてきた。「アスカウェイブ」に続き、近年では「あすかルビー」が代表格となっている。そんな中、2010年、県の期待を背負う新たないちご「古都華（ことか）」がデビューした。開発のスタートから実に8年、苗の交配の吟味や選抜を繰り返し、何万種類もの苗から選び抜かれた品種だ。普段見慣れたいちごよりも断然赤色が濃いのが印象的な「古都華」は、糖度や酸味があすかルビーよりも高く、果実が硬いのが特徴。萩原さんの農園でも、一昨年前から「古都華」の生産を始めた。話題性も高く、消費者からの反応は上々なことから、今後の売れ行きにも期待を寄せている。

丹精こめて作られた赤く輝くいちご